

# かたりべ 9

豊島区立郷土資料館だより



おいしいおいしい、おもち

上の絵は長崎第五国民学校（現・千早小学校）の三年生だった伏見千鶴子さん（当時は神尾姓）が、戦時中、福島県鹿島町の疎開先から、お父さんに出した手紙（一九四四年一月四日付）に描かれていたものです。

きのふの明治節で朝おいしい  
おいしいおもちをいただく  
ころです。いまはせいざして  
ゐるところです。

空襲をのがれ、遠く東京を離れての生活の一こまを、少女はこう書き送りました。

でも、親への手紙には決して書けないような、つらい日々が続いていったのです、と伏見さんは語ってくれました。

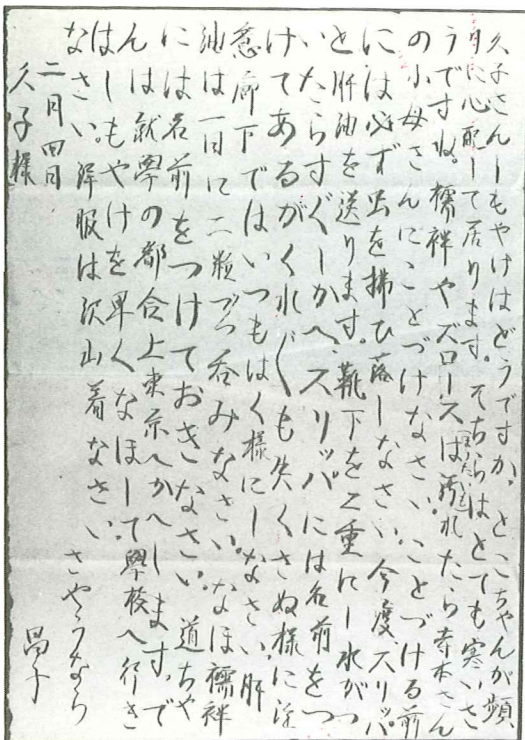
食べ物やだんだんと不足するようになり、翌年六月からの伏見さんの日記には朝・昼・晩とスイートンが続く献立表が書かれています。

左のがきは、区内長崎に住んでおられた真板昌子さんが、妹さんの久子（現姓竹内）さんにあてた一九四五（昭和二〇）年二月四日付けのものです。久子さんは、当時長崎第五国民学校（現、千早小学校）の五年生でしたが、前年の八月二六日から、戦争の激化にともない集団学童疎開で福島県相馬郡中村町（現、相馬市）に来ていました。

しかし、東京にいる久子さんの家族は、寒さの厳しい福島に疎開した久子さんが心配でなりません。というのは、久子さんは毎年冬

になると必ずと言ってよいほどしもやけにかかっていたからです。一二月までの久子さんからの手紙には、しもやけのことは書かれていませんでしたが、一月になって子供を見舞いに行つた隣家の人が、久子さんがしもやけで寝こんでいることを教えてくれたのです。

そこで出されたのがこのはがきです。その一行一行からしもやけやシラミ、食糧不足に苦しむ久子さんを心配する家族の暖かい思いやりを読みとることができます。そして折り返し二月八日に久子さんから手紙で、しもやけがかなり悪くなっていること、見舞



久子様

いに来る友達のお父さんが友達を連れて帰ることなどを知らせてきました。

直ちにお父さんの栄一さんが久子さんを迎えに行きました。久子さんは重症

で立つこともできない程だったので、お父さんが背負

って駅まで行き汽車に乗りこみました。途中、水戸の

近くで空襲警報にあいまして、汽車の下に逃げるこ

ともできず、死を覚悟で汽車の中に留まっていたとい

真板栄一さんは、このように集団疎開生活の厳しい実情をつぶさに知ることのできる貴重な手紙類を、一九七三（昭和四八）年に『疎開の記録』として翻刻、自费出版され、資料館にも一部寄贈して下さいました。写真のはがきも、今回の特別展のために貸していただいたものです。

一九八七年度特別展「さやうなら帝都 勝つ日まで」—— 豊島の学童疎開 —— では、このような疎開学童達の厳しい生活の実情をものがたる新発見の写真やはがき・日記等の展示、当時使われていた学寮の復元、今回新たに発見された学童疎開の貴重なフィルム資料などを御覧いただき、さらに公開座談会など盛りだくさんの企画を通して、さまざまな角度から集団学童疎開とは何であったのかということを考えていただければと思っております。

◎開催期日 七月二日～八月三十日

◎ビデオ上映 「疎開生活の記録」——長崎第五国民学校→現・千早小学校——

劇映画「子どもの頃 戦争があった」——松竹映画——

◎公開座談会 「いま、学童疎開を語る」

七月十一日（土）午後二時より

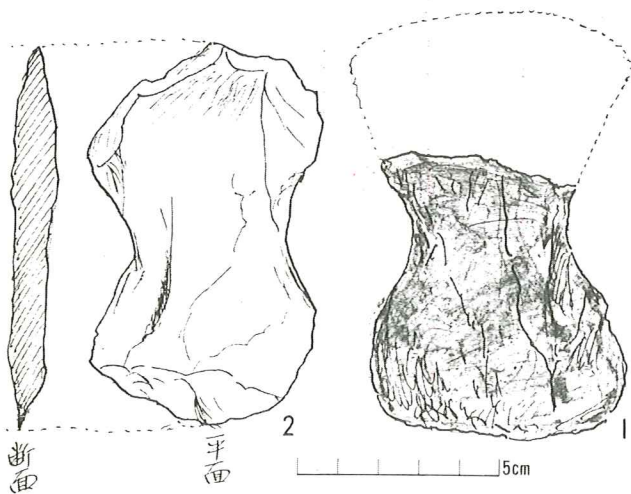
（月曜日は休館です）

今までわからなかった原始時代以来の先住民の生活の痕跡が、次第に私たちの目の前にその姿を現してくるさまは、感動的でさえあるものです。そして、区内でも少しづつではあります。そうした古い時代の歴史の痕跡を明らかにするための調査を始めました。

豊島区は、山の手でも最も早い段階で市街化した地域であり、区内の自然景観の大部分も比較的早い時期に失われています。このため、今までに知られていた遺跡の数は区内全域でわずか九カ所に過ぎませんでした。と言うのは、私たちが遺跡の存在を知ることができるのは、ほとんどの場合が地表面に落ちている土器や石器を採集できる条件がある時に限られているため、畑がなくなり住宅やビルが建ち並ぶ現在の豊島区では、新たに遺跡を発見することは奇蹟に近いことだったわけです。先の九カ所の遺跡は全て、区内にまだ畑が残っていた頃に発見された場所でした。ところが、お隣の板橋区や練馬区・新宿区等で発見された遺跡を見ると、もっと多くの遺跡が密度濃く分布しています。そして豊島区に入り急に遺跡が減少するというのが実情だったのです。「きつと、発見されていない遺跡が、まだ眠っているに違いない。」と考えられることは間違いではないでしょう。今後、緻密な現地調査をすすめていく必要があるわけです。

同時に、今は忘れられている古い記録の中から、遺跡のあった場所についての情報を捜すことも大切です。今回紹介する遺跡も、そうした記録の中から発見されたものでした。

故三輪善之助さんは、豊島区在住の郷土史家として良く知られた方ですが、この三輪さんの書かれた記録類が、現在は郷土資料館に収められています。そして、その中に高松周辺の文化財を中心にまとめた『豊島の高松』という自筆



三輪善之助さんの描いた石器の実測図

の文章の綴りがありました。この中に、「高松町発見の石器時代の遺物」という章があったのです。その一節を紹介しましょう。「高松町三丁目の豊南商業学校の南側の畑地で昭和十九年五月六日に私は一個の石器、分銅形石斧の断片を拾得した。これは全形の半分程の残片である(図1)。此地から出土した大切な標本とすべきである。悠久三千年の昔、此地の住民が石を割り：上下両刃の斧の様な利器を作りこれで日常生活の道具に使用したものが破損したので捨てられたものと思はれるのである。此町として最古の遺物と云ふべきである。昭和二十一年八月二十三日の高松町三丁目島地にて打製石斧の完形のもの一個を篠崎四郎氏が採集せられた(図2)。形状石質等に於いて私の採集したのと殆んど同形のものである」。この記事によって、従来知られていなかった縄文時代の遺跡の所在が一カ所判明することとなったわけです。残念なことに、この三輪さんが石器を採集した場所は、今は公団住宅となっており、簡単に調査をできる状態にありません。しかし、資料館では何とか三輪さんの記録を事実として確認したいと考え、調査を計画しました。

この調査の結果はどうだったのか、そしてなぜ「この場所が遺跡であつてもおかしくなかるう」と私たちが判断しているのか、次回にはその辺について触れてみたいと思います。

## 声

——子供たちの声から——

「この前の社会科見学で、しりようかんに  
いって、いろいろなことがわかってよかつた  
です。とくに、せつめいが分かりやすかつた  
ので、『あ、そうなんだなあ』とすぐ  
分かりました。それに、むかしの地図や、  
しゃしんなどもあって、いいところだなあ  
と思いました。」

こんなうれしい手紙の山が、去る三月二四日  
資料館に届けられました。手紙の送り主は、区  
立池袋第三小学校の三年一組（現、四年一組）  
の皆さんです。

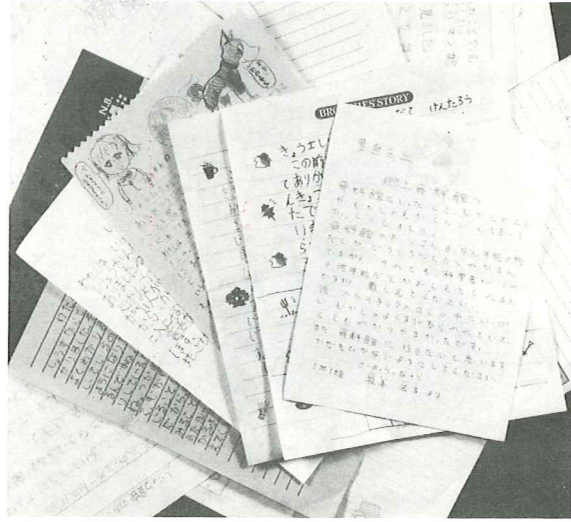
資料館の春は、元氣一杯の子どものたのびの  
声とともにやって来ます。春は、資料館にとつて  
小学校を主とした社会科見学のシーズンでもあ  
ります。今回の「声」ではそんな子供たちの声  
を紹介してみたいと思います。

「物を見て、かんだうしたり、作っている  
人のきもちをかながえたりしました。作る  
人はとてもたいへんなことをお母さんにお  
しえたら、こんどの日ようにみにいこうと  
いうことになりました。」

「今は、でんきやきかいでものをつくつた  
りしているけど、むかしはせんたくも手で

あらっているんですね。つかれるでしょう  
ね。でもわたしは、しりようかんに行って  
昔（の豊島区は）、山や木が多く、花がいっ  
ぱいさいていることに気がつきました。花  
が多いなんてすてきなことですね。」

とても大切な点に気がつきましたね。



「私がしりようかんにあったアトリエ村の  
もけいや、池袋のヤミ市のもけい、むかし  
の物などを見たことを母に話したら、『こ  
んど行ってみようかな』と言っていました。  
これからもずっとしりようかんをつづけて  
ください。」

——今度は、家族全員で見に来て下さいね。

「資料館のおじさんは、なん年前の物だと  
か、どのようにしてわかるのですか。それ  
とも科学者がおしえてくれるのですか。教  
えて下さい。」

資料館には、学芸員というものを調べた  
り、研究したりする人たちがいます。わ  
からないこと、聞いてみたいことがあれ  
ばどんどん聞きに来て下さいね。

まだまだ紹介したい手紙はたくさんあります  
が、池袋第三小学校三年一組の皆さんからの手  
紙は館員にとって大きな励みとなりました。そ  
して、郷土豊島区を築いてきた人々が育み、残  
してきた文化遺産に対する皆さんの関心の大き  
さを改めて感じる事ができました。担任の和  
田先生からも、「これを機会により深く学習に役  
立させていきたいと思っております。」とのうれ  
しい言葉をいただきました。春先の見学だけで  
なく、一年間を通じて学校の先生方や生徒の皆  
さんとお付き合いできればと思っております。

かたりべ  
No. 9

1987年6月30日  
発行

豊島区立郷土資料館  
豊島区西池袋2-37-4

電話03-980-2351